

# 沖にちょっと移った海岸線～稻毛海岸の第一期埋立～



約60年前、ギャラリー・いなげの目の前は海でした。稻毛の街には海水浴、潮干狩り、海苔養殖など海の様々な記憶があります。1961年（昭和36年）、稻毛海岸では埋立事業が始まり、今では海岸線は沖に向かって約2.7km先まで移動しています。今回は2回に分けて埋立てられた稻毛海岸の「第一期埋立」について、地域の方のお話を基にご紹介します。

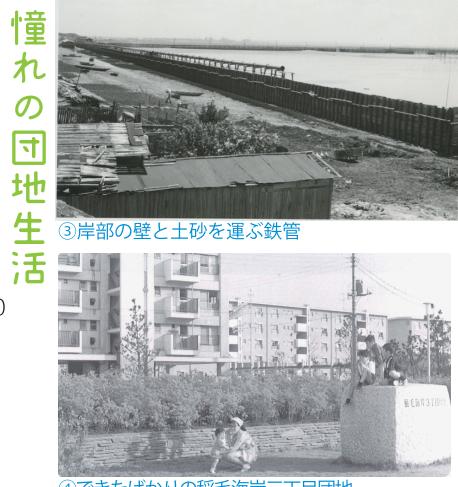
# 海気通信

16号  
2019/10/10

発行

千葉市民ギャラリー・いなげ

〒263-0034  
千葉市稻毛区稻毛1-8-35  
TEL:043-248-8723  
FAX:043-242-0729  
<https://galleryinage.wordpress.com>  
\*バックナンバーをダウンロードできます。



③岸部の壁と土砂を運ぶ鉄管  
④できたばかりの稻毛海岸3丁目団地  
⑤三丁目団地の夏祭り。自慢の神輿が登場

憧れの団地生活

第一期の埋立は、沖に約400mと実験的な範囲でした。埋立に使う大量の土砂はどうしたか？意外にも近くの沖の海底の砂を、海上に張り巡らせたパイプで運び、土地を造成したそうです。こうして戦後初めてできた市内最初の埋立地が「稻毛海岸」地区です。子ども時代稻毛在住だった藤川さんは、まだ何もない広大な埋立地でよく野球をしたそうです。土の質か水の影響か、足がズボッとはまってしまうことがあったそうです。

高度経済成長期に急速に進んだ集合住宅建設の波に乗り、稻毛海岸にも昭和43年にすでに3つの団地が完成していました。寝食の空間を分けた近代的な「団地生活」は、夫婦や家族が引越してきました。都内から稻毛団地に移り住んだ自治会長の鈴木さんは、そのお一人。昔ながらの下宿生活からシャワートイレ別、最新のダインニングキッチン付の団地暮らしに、心踊ったそうです。

自らたちでつくる街

ですが、夢の団地生活も最初からすべてが整っていた訳ではありません。住居こそあれど、環境整備はまだまだ、さらには住民は赤の他人同士。そこで、まず自治会の編成から始まり、親睦を深めるための婦人会・子ども会、さらに見知らぬ土地で暮らすお年寄りの心細さ・不便さを支えるための老人会など、どこの団地でも地域を支える「コミュニティ」を一から作りました。

また、新しい街には伝統行事もないのです。夏祭りなどの年中行事も、各団地で工夫を凝らして企画されて、今でも熱心に続いているです。



⑥三丁目団地老人会「さつき会」稻岸公園にて  
⑦お揃いの帽子の子ども会  
⑧三丁目団地の夏祭り。自慢の神輿が登場

## 子どもたちの遊び場

さて、その頃団地の子供たちは？最初、学校は稻毛第二小学校と稻浜中学校の2校のみ。新しい団地が建つたびに一斉に転校生を受け入れていたため、教室不足でプレハブ校舎で学んだ子も多かったようです。稻毛海岸地区には、稻毛プールセンター（数年で水が枯れて？閉園）や海洋公民館こじま（詳細は海気通信9号）、釣り堀、廃車のポンコツカーを走らせるリアル？ゴーカートなどが点在。当時はまだ埋立地先で潮干狩りや釣りもできたので、子供に混ざって大人もハゼを釣つて天ぷらにしてビールのつまみになんてこともあったようですね。



## さよならオーシャンビュー

団地の窓から東京湾を一望できたのも束の間、昭和44年には稻毛海岸の第二期埋立がスタートします。そのお話はまたの機会に。

今回は、稻毛3丁目団地元自治会長・長倉祐作氏、稻毛団地自治会長・鈴木重夫氏、植草昭教氏、藤川正男氏のお話を元に編集しました。（写真ご提供は①稻毛団地50年の歩み②齋藤りづ子氏、③千葉市立郷土博物館④～⑦稻毛海岸3丁目団地20周年記念誌「なぎし」⑧松田美津江氏、⑨植昭教氏。どうもありがとうございました。）